
なろうの異世界転生モノとかについて話し合う物語

葵 秋一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なろうの異世界転生モノとかについて話し合う物語

【Nコード】

N9634Z

【作者名】

葵 秋一

【あらすじ】

喫茶店「えーでわるで」で、なろう、とかいうサイトに小説を投稿している二人の少年少女が話し合う物語、というのが主で実際は小説を書いている二人が、喫茶店でアイデアを出すために話し合っているという感じの物語です。言うならばラジオみたいなイメージです。そして小説について話し合う二人は今日も、いろいろとグダグダな話をしていきます。一応、なろうと直接話が絡んでいて、主に異世界転生とかについて超軽口のコメディー的な議論をするような形式で書いていく予定です。が、ちゃんと普通に小説のことも

話し合う話としても成立する予定です。

本編に入る前に読んで欲しい事柄です

この小説は、「小説家になろう」の異世界トリップモノや、小説についての意見を言うものではありませんが、決して馬鹿にするという話ではありません。

また、エッセイではありません。ちゃんと、主人公がいてヒロインがいて、物語みたいなものがあります。

この話は作者の「小説家になろう」や、小説についていろいろなものの考えを、かなり軽めのコメディ形式であくまで物語として展開する予定です。

ですが、もしこれを読んで不快だと思われた方は「戻る」を押すことをおすすめします。

というわけで、かなりグダグダな話になると思いますが、どうかよろしく願います。

あらすじ

喫茶店「えーでわるて」

不思議な喫茶店、と僕達が住む青葉町で噂されているのはきっと小説を書くのが好きな人間がここに集まるからだろう。

その店の奥側のテーブル席にはいつも同じ人達。

ノートパソコンをテーブルの上におき、横には一般小説やライトノベルが無造作に置かれている。

そして、対面に座っているのは二人の人物で、一応この話の主人公である僕こと久山^{くやま} 高明^{たかあき}とちょっとした知り合いの女の子、成瀬^{なるせ}

ますみ
真澄。

僕は小説を書くのが好きで、とあるサイトで自作小説を投稿している仲だ。

そして、今日もここでいろいろと小説についての議論を展開しているのです。

なのですが、彼女はちょっと意見を述べると熱く語る人物でもあります。

本編に入る前に読んで欲しい事柄です（後書き）

もしこの話が気になるのであれば、一旦お気に入り登録しておいて、つまらなかつたら後にはっさりと消していただけるとありがたいです。

ぶろろーぐ（前書き）

一人称を久しぶりに書くので、かなり戸惑っております（汗）

ぶろろーぐ

僕が住む町は、ちょっと変わっている。

「小説町」と、この町に観光に来た人達は口をそろえて言ったりするのは、きつと僕らの町では小説を書くということが流行っているからだろう。

それは本当に偶然のことであって必然じゃない。

ただ、小説を書くという物好きがたまたま集まって出来た町なんだと僕は勝手に解釈をしているわけだ。

そんな小説町と呼ばれる青葉町のとある一角。

「えーでわるて」と軒先に吊るされた、西洋風の書体で書かれた看板を見ると僕は安心したような心持になってしまう。

きつと、ここが僕らの拠点だからなのだろう。

いつものように喫茶店「えーでわるて」の扉を開ける。

軒先の看板が西洋風であるならば、全体的な作りもやはり西洋風だ。

シックな色合いの木が組み合わさった、古風なデザインがこの喫茶店の特徴で、まるで観葉植物を眺めていて癒されるかのよう。

扉についているベルが、からんからんと鳴って中に入ると、来客者を歓迎するかのようにウェイトレスが小走りで駆け寄ってきた。

「いらつしやいませ」

ぺこりと大きくお辞儀するのは、若いウェイトレスだった。僕よりも一、二歳くらい年上の人だ。

そして僕はこの人を知っている。

「どうも。今日も来ましたよ、麦穂さん」

照れを隠すように右手を頭の後ろに当てて搔いた僕は、決して目の前でお辞儀をするメイドの格好をしたウェイトレス、荻原^{おぎわら} 麦穂^{むぎほ}さんにナンパをするべくやって来たわけじゃない。

「あらあら、これはこれは高明君じゃないですか。相変わらずここがお好きなんですね」

頭を上げて来客者を改めて確認すると、クスリと手を口に当てて忍び笑いをする麦穂さん。

流石、この店一番の看板娘だ。この人の笑顔を見るために、わざわざここにやって来るほどの人気がある噂が立つのは本当のようだ。

「まあ、そんなところです」

綻ばせる顔をまじまじと見せ付けてくる麦穂さんに、僕は頬を若干赤く染めながら、店の奥側へと目を向けた。

「あの……ところでなんですけど、もしかしてあいつ、先に待っていたりします?」

曖昧な言葉ではあったものの、麦穂さんがはっきりと理解できていたのは、僕はこの店の常連客だからだ。

そりゃあ、週に三、四回も来れば嫌でも顔を覚えてしまうに違いない。

「ええ、あの方ならいつもの席で待ってますよ」

笑顔を保ったまま麦穂さんが指し示すように店の奥へと指を指した。

「そうですか。ありがとうございます」

「いえいえ、それじゃあ二名様ということで間違いないですね？」

「はい」

こうして店員と気さくに話した後、僕はあらかじめ待たせていた人の元へと向かおうとした。

「あ、そういえば」

すると、思い出したように麦穂さんが目を上に向けてから僕へと視線を移す。

「良く分からないのですが、私が見る限りちょっと不機嫌そうな顔をしてましたよ。何だか異世界がどうやらこうやらと呟いていました」

ああ、と僕は手を頭に抱えるポーズをとってしまう。

その一言で僕はあいつの言いたいことを悟ってしまったからだ。

「私がついに、例のサイトのことでしょうかね？」

「お察しの通りですよ」

呆れた表情で奥へと向かおうとするのを、麦穂さんは傍観者よろしく楽しそうに笑っていた。

「この町の人達はみんなあのサイトを利用してますからね。言いたいことはよく分かりますよ」

フフ、と終始笑みを絶やさない麦穂さんの元から去るのがどこかもったいない気がしたが、待ち人をこれ以上待たせるわけには行かないのでさっさと席へと向かうことにした。

僕ともう一人のモノ書き

「遅かったわね」

えーでわるての店の奥、入り組んだ店の中で一番奥に位置する場所へと向かうと、麦穂さんの言ったとおり、待ち人が不機嫌そうな目で僕を迎えてくれた。

「悪かったよ。だけどここに来る前にノートパソコンのチェックをしてたら不備があったんだ。幸い持ってくるのに影響はなかったから良かったんだけど」

そんな事を言いつつ、ケースに入れてあるノートPCをテーブルの上に置いてから、対面の席に着席する。

「まったく。毎度毎度、重たい思いしてよく持ってこれるわね。別に持ってこなくてもいいのに」

「そうはいかないよ。こうして話をしているアイデアが浮かんだらどうする？　すぐに書き留めておく必要があるだろ。それに、僕はネット小説を投稿しているんだからいつでも自分達が投稿した作品をチェックできるようにしないとね」

ふーん、とあまり興味がなさそうに返事をする待ち人。

別に、浮かんだアイデアなら紙で出来たメモ帳に書き留めればいいことだ。

けれども、結局は執筆する道具としてパソコンを選んでいるため、PC内でアイデアを保存したほうが後々便利だったりするのだ。

まあ、一応どこでもメモを出来るようメモ帳とボールペンは持ち歩いているんだけど、こういった店で長話をする時はパソコンがあると便利なのは事実である。

「で、今日は一体どんな用事で僕を呼んだわけ？」

やや訝るような目つきで僕は目の前の人物に尋ねた。

本当は、今日一日家で溜まりに溜まった小説を消化するべく読書に耽ろうと考えていた。

どうやら僕は、小説を買って満足するタイプのように、買うのはいいが買う速度に比べて読む速度が圧倒的に追いついていない。

だから、家に戻ると未読の小説ばかりがタワー状態になって僕を待っているわけだ。

それでとりあえず読みやすい文体の小説から読んでいこうと意気込んだ時のこと、目の前で立ち上げているパソコンをぼんやりと見つめている少女、なるせ成瀬 ますみ真澄からいきなりメールが来た。

『いつもみたいに、えーでわるで待ってるわ』

実に用件を簡潔に捉えた文章だと思う。

ただ、こういったことはもう何十回と見てきた文なので、いままら変な気にもならない。

そういうわけで、僕は既に常備となりつつあるパソコンをケースに入れてここまでやって来たのだ。

ちなみに、僕の対面に座っている真澄は決してだが、彼女ではな

い。

世間的にはこのようなこじやれた喫茶店で昼下がりを通ぐすのは、カップルにも見えなくはないが、ふとした偶然というか、この店であるきっかけが原因でこのように話し合う仲になっただけである。

確かに成瀬真澄は僕目線で言えば、可愛い女の子だと思う。

今時の年頃の女の子ではあるが、髪を染めることなくセミロングの黒を真っ直ぐに伸ばしている。その髪質は艶やかで触ったことはないものの、風が舞った時にゆらゆらと揺れ動くのを見ればとても柔らかいだろうなという印象を持つ。

僕よりも頭一つは小さな背丈に、少々華奢な体つきだけど女性の象徴である二つの膨らみは年相応にある。

加えてなかなか端正ある顔立ちも手伝ってか、たまに周りの人達が振り返ったりするくらいだ。

それは、きつと彼女の外見にプラスして、服装がゆったりとした長袖Tシャツに、下がチェックのミニスカート、その下にニーソックスを履くのが彼女の基本的なスタイルだからかもしれない。もちろん、今日も同じ服装だった。

「今日、高明君を呼んだのは他でもないわ」

パソコンから目を僕へと向ける。

真澄のトレードマークの一つである、やや吊り上った目が僕を捉えた。

「ちょっと愚痴……みたいなものを聞いてもらおうと思ってね」

ちょっと恥ずかしそうにして言ったのは、そのようなことを聞かされてくれた僕に対する気恥ずかしさかもしれない。

「愚痴みたいなものねえ」

愛想の無いような返事に聞こえるかもしれないが、いつものことなので特に驚くことがないために、このような短い返答をしたのだ。

真澄は目を閉じて自分の胸に片手を添えて大きく深呼吸を一つする。

そうやって言い出す準備をしたのだろうか、目を大きく見開くと僕に向かって何かをぶつけるように言葉をはき捨てたのだった。

「なんで、小説家になろうは異世界転生モノがあんなにも多いのよー！」

……言い忘れていたが、僕と真澄の趣味は小説を書くことだ。

一言で言うならば創作小説を書いているというべきか。

そして、なぜかこの町は小説を書く人が異様に多い。原因ははっきりしていないが、一種の流行だと思っている。

渋谷ではギャルがたくさんいるように、青葉町では小説を書いている人が多いだけの話だ。その奇妙な連中の中に僕達はある。

さらに、小説喫茶なるものがこの町には存在していて、この喫茶店えーでわるてもその内の一つであり、周りを見渡せばモノ書きを自称する人達がたくさんいることだろう。

よく、作家さんは喫茶店で小説を書くなんてことを聞いたことがあるが、その風潮を真似ているのか、テーブルには小説（もちろん一般小説やライトノベル、資料本と種類は問わない）が散乱しており、いたるところで小説についての意見討論や、キーボードをせわしなく打つ音が、耳を澄ませば聞こえてくる。

一応ここで断っておくが、僕達はモノ書きを自称してはいるものの決してプロではない。

公募に応募しようかなあと画策しているけど、まだまだ実力がおぼつかない青二才である。

だから、公募へと送る前に上る階段の一段としてネット小説を投稿することにしたのが過去の話。

『小説家になろう』

青葉町のモノ書き連中で最も使われているサイトで、おそらくネット小説投稿サイトでは一番広く知れ渡っているサイトのはずだ。

ジャンル問わずに短編、長編実に様々な作品が投稿されている。さらに驚くことに小説投稿数が148,361作品とかなり膨大だ。

そんな凄いサイトに僕達は日々、悩み苦しみ楽しみに書いた小説を投稿しているわけだが、真澄はいきなりそのサイトのことを一蹴していた。

「ど、どうしたの真澄、そんなに声を荒げちゃって」

発言した後に真澄の右拳がわなわなと震えていた。

どうやら、かなり心から叫んだと見受けられる。

「どうしたもこうしたもないわ」

落ち着けと僕は両手で制したことがよかったのか、思わず立ち上がる勢いで発言した真澄が落ち着きを取り戻したようだ。

「私はね。どうして、なるうの作品に異世界転生モノが多いのかを心から叫びたいのよ」

フン、と腕を組んで窓際の席だったためにブラインドが掛かった窓へと顔ごと背けた。

そう。これは僕と真澄が日々小説を創作するためにどうすればいいのかを意見しあう物語。

そして今回、今から始まるのは真澄から始まる小説サイトに関する意見を僕が聞く物語。

「とりあえず、思ったことを言う前にまずはオーダー頼むわね。今日はお昼何も食べてないんだから」

なんともマイペースな女の子なんだろうか。

けどどういえば、僕もまだご飯を食べていなかった。

真澄が十二時半という実にお昼時の時間帯に呼び出されたせいだ。

とにかく、愚痴話なるのかは知らないが意見を聞くのはは一旦昼食を済ませてからだ。

というわけで、前半戦へと入る前の下ごしらえのため、真澄はテーブルの隅っこにおいてある店員呼び出しボタンを勢いよく押したのだった。

僕ともう一人のモノ書き（後書き）

こういったシステムで書いていく予定です（笑）

ちなみに補足事項ですが、主人公とヒロインはライトなノベルを書くモノ書きさんですので、ある程度の用語は知っているという感じで見ていただくとありがたいです。

異世界転生モノ考察 その1

「さて」

昼食を食べて一息ついた後、真澄の方から口火を切り出した。

「私はね、どうして、なろうで異世界転生モノが多いかが不思議で仕方がないの」

「はあ」

僕は曖昧に頷く。

僕らが投稿しているネット小説サイト、小説家になろうは規模こそは大きいのだが、何故かよく読まれるジャンルが偏っている傾向にある。

例えば、真澄が口を尖らせて言う異世界転生モノ。

これは、簡潔に言うなら現代で生活していた主人公がなんらかの事故で死んでしまう。その後、神様とか人間ではない何か、そしてその他もろもろが現れて異世界に飛ばされるまたは飛ばすといった感じの話である。

その後は、異世界で起こる出来事を読んでいく形になるわけだ。

「確かにこのサイトは異世界転生モノが多いね」

ちょうど身近にパソコンがあるわけだから、キーボードを叩いてなろうのページへと飛ぶ。お気に入り登録をしているからすぐだ。

すると、白い背景にシンプルなデザインのページが姿を現した。

「だからって今更なんでこんなことを聞くの？　僕らはそれを薄々感じてながらもここに投稿してるのに」

僕だって、ここに投稿してから一ヶ月くらい経過した時のことだ。初めは自分の書いた小説がネットにアップされていること自体が楽しくて、たびたび頑張って更新していた。

お気に入りユーザーがこないかなあと待ち望んでいて、そして次の日にユーザーページを確認すると、初めて2ポイントが増えていた時の感動は今でも忘れられない。

だが、こうしてポイントが少しずつ増えていくにつれて、ランキングという禁忌に触れてしまった。

あそこを見れば、二桁ポイントなんてちやちなくらいに恐ろしい点数が加算されていた。

中には五桁なる怪物小説が存在しているわけで、凄いなあと圧倒されつつも、画面をスクロールしていったら、あることに気がついた。

ランキング上位がほとんどファンタジーで占められていたのだ。

「そんなことくらい分かってるわ。ただね、こうして頑張って投稿してっていくうちに、そのような問題に直面するのよ」

まるで深い話をするように腕を組みながら話す真澄は、えらく真剣だ。

「ネット小説に投稿している身なら分かるわよね。投稿しているんだから、上位を目指したいのは当然のことだし、感想だって貰いたい。だけど、私が書いているような現代モノだとしてもポイントが入りにくいのよ」

「僕も同じように現代バトルモノを書いているけど、それは自分の話作りがランキング上位に劣っているからじゃないかなあ」

確かに、ランキング上位作品は傾向は偏っていても、結局のところ読者が評価したりお気に入り登録をしているからこそ、成り立っているのだ。

いくらなんでもあのポイントを不正なんかで出来るわけがない。仮にするとすれば、一体どれだけのアドレスを登録してなるうユーザーを持たなければならぬか。

なんて間抜けなことを考えていたら、真澄が目を細めて不機嫌そうな顔を改めて作り出した。

「分かってるわよ。私だってね、なかなか浮かばないアイデアを捻って投稿しているわ。それはもう何回か推敲を重ねてランキング上位にこそ劣っているけど、登録してくれた読者に飽きられないよう頑張っているわ」

一度書いた自分の文章を、何度か自分で読んで誤字や脱字を訂正することを推敲という。僕だって、投稿する際は恥をかかないよう何度も推敲を行っている。

「だけど、いくらなんでもジャンルが偏りすぎてるのよ。それじ

「やあ、私達が書いているジャンルで上に行くのは難しいわ」

なるほど。要するにポイントがなかなか加算されないからランキング上位に妬いているんだ。分かりやすい小さな子供みたいな心理だなあ。

そんな事を思っていると、僕の心を見透かすように真澄の吊り目を僕へと向けてくる。

「今、私が絶対に嫉妬しているって思っているでしょ」

「う、そんなことないよ」

目を背けるが、時既に遅し。

「やっぱりね。高明君とはまだまだ短い付き合いだけど、単純だから分かりやすいわ」

人のことが言えるのかと、僕は心中で揶揄しておいた。

「まあ、なかなかアクセス数が増えないのに対する八つ当たりだっことは自分自身認めてるわ。でもね、いくらなんでもおかしいと思わない？」

「なるうでの異世界転生モノに対するウケ具合ってこと？」

「そうよ。なにせ累計ランキングTOP100の八割はそのジャンルで占められているんだから」

僕のパソコンを奪い取るように、画面を真澄の方へと向けて力チャカチャといじくると、クルリと画面を反転させて、真澄の指が画面に沿われていく。累計ランキングのページだった。

それで、僕が真澄が差し示す指に合わせてスクロールしていくと、ちよつと見たただけですぐに分かるくらい異世界転生モノがずらりと並んでいた。

「凄いなあ。なんでこんなに占めているんだろう?」

「でしょでしょ。やっぱりそう思うわよね。だから私の言っていることが分かるでしょう?」

「そういわれたらなあ。改めて不思議に思うよ」

自分の文体や書き方の訓練をすることが主な目的だった僕は、あまりなろうでウケるジャンルなんて考えていなかった。だけど、改めて見せ付けられる事実になかならず疑問を抱き始めていたのだ。

「だから私は今日、ここで高明君と一緒に原因を解明しようと思うの」

「え?」

「だから、異世界転生モノが上位を占めることに對する意見を言い合おうよ」

ニコリと笑ったのは、きつと僕に逃げ道を作らないためだ。

本当は、いつもみたいに小説に関する話だと思っただけにやって来たのに、蓋を開ければサイトに対しての、ある意味文句だもんなあ。

「……はあ」

僕は溜息を一つつく。

まったく、小説に関するものじゃなくてサイトのジャンル傾向に

ついて分析するはめになるとは。

ずれかけた眼鏡に手をかけつつ、だが内心では少し楽しんでた自分がいた。

どうしてこんなにも異世界転生モノが郡を抜いて流行っているのかを理解するにはいい機会かもしれないな。

「わかったよ。だけどあくまで一個人の意見だからあまりあてにしないでくれよ。それに、店の人でこのジャンルを好んで書いている人がいるかもしれないから、あまり大きな声で言わないこと」

「わかってる。それに高明君は理系人間だからね。分析得意そうだし、だけど理系って作家さんとはかけ離れている気がするかもね」

「あつ、それ偏見」

作家さんに文系理系は関係ない。

なぜなら、僕が読む作家さんの経歴に理系が多いからだ。それも理系っぽい話じゃなくて、甘い恋愛モノを書いているくらいだ。

「さてと、偏見云々はどうでもいいとして、まずはどうして異世界転生モノが流行るかってところから考えていこうか」

こうして、あまり意味があるのかよく分からない真澄の愚痴から始まった、小説家になろうで異世界転生モノが何故流行っているかを考える時間が幕を開けたのだった。

異世界転生モノ考察 その1（後書き）

文字数が少ないのは、軽口コメディ形式なので3000文字を目安にしております。ですので展開が遅いかもしれませんが、どうかお付き合いください。

異世界転生モノ考察 その2

「うーん」

考えるのはいいのだけれど、まずはどこから話を始めればいいのかがいまいち分らない。

どうして異世界転生モノが流行っているのか、と一言で言われてもつまらない解答を投げやりに言うならば、流行っているからとしか言いようがない。

しかし、そんな根拠も無い発言は理系人間でもある僕のポリシーに反する。

あくまで、どうしてウケているのかを理論付けるのが考察というものなのだ。

「ならば」

眼鏡を整えて、不敵に笑う僕。

「あつ、格好つけてる」

「うるさいよ!」

やはり現実でこんなことしたら、馬鹿だと思われるのか。あまり目立つような性格していないからこの時くらいこんなことしても良いだろう。

「まずは、このサイトの年齢層を把握することがいいと思う」「年齢層?」

僕が放った一言に対し、目を丸くして聞き返す真澄。

「だってそうだろう。小説はね、読者のことを考えるのが第一なんだよ。自分が書いて満足するだけの小説だったらそれは読者を置き去りにしていると言うことなんだ。まあ、ネット小説だからね。自分の書いた小説をあげる意味では趣味の範疇だからそんな規則は無い。だからあまりどやかく言う必要もないけど」

「うーん。理屈っぽいこと言うわね。だけど、それと年齢層がどう関係あるの？」

「例えて言うなら漫画の週刊誌が良いかな。あれって読んでほしい具体的な年齢層が決まっているだろう」

「そうね……だいたい中学生くらいの年齢かしら」

うーんと、真澄は人差し指を頬に当てて思案顔で考えている。

「漫画家はおそらくだけど、年齢層を決めてから自分が生み出す世界観を作っているのだと思う。だってそうだろう。作者が渾身の作品を作ってもウケなければそれはただの駄作だ」

偉そうな言い方になるかもしれないが、実際にそうだろう。

なるうの作品の中でも、文体が綺麗な小説なんて掘り起こせばいくらでも出てくる。だが、そのような小説に限って評価が低い。

「僕が思うに……いや、なるうで活動している作家さんならほとんど把握しているだろう。なるうの読者層は中高生なんじゃないかな」

「だと思っわ」

僕の意見にはどうやら納得のご様子。それから数秒の後、真澄はあつと小さく声を上げた。

「中高生が好きな題材って」

「きつとリアルな現代モノよりも、異世界のファンタジーの方に目がいきそうだね」

実はこうして意見を出す前に、一度頭の中で黙考していた。

そして、順位を見た時からある程度異世界転生モノがウケている理由が浮かんでいたのだ。

「それに、書き手も中高生が多いなら体験の多さに縛られる現代モノよりも、想像で補える異世界モノのほうが書きやすい」

「現代で生きている描写が全く無くて、いきなり俺は死んだから始まる話が蔓延しているのはそういうことが絡んでいるわね」

異世界転生モノの始まりの多くは、主人公が死んでどこか分からない空間で思考している場面から始まるのが多い。

つまり、てつとりばやく異世界へと飛ばされるシーンを描きたいのだろう。

「それで、神様仏様が現れて、ワシが異世界に飛ばしてやるぞで、はい異世界へってなるのね」

「その馬鹿にした声はいただけないけどね」

阿呆の芸人よろしく、口を尖らせて真澄は言っていた。

まったく、可愛げのある顔が台無しだ。

「大筋のパターンでいくとあれかな。主人公は暗い人生を歩んでいる。そうやって町とかどこかをふらついているとトラックに轢かれて死んでしまう」

「何だかお笑い芸人のコントみたいね。笑ってしまうわ」「しーっ」

僕が席を立つてキョロキョロ見渡したのは、このような作品を本気で書いている作家さんが周りにいる可能性があったからだ。

まったく、もしこの話が他のなろう作家さんに聞かれていたら殴り殺されるぞ。

だけどよかった。どうやら話は聞かえていないようだ。というのも、よくよく考えたらこの席って店の中で一番独立している場所だったっけ。

コホンとわざとらしい咳払いをして、僕は話を続ける。

「それで、死んだ後でよく分からない空間へと飛ばされて、『あれ、俺って死んだの?』みたいな台詞。そして、しばらくしたら神様がやってくるんだよね」

「そうそう。そして悔いを残した人生をリセットしてやるぞって、異世界に飛ばすというわけ。容姿はそのままのパターンと生まれた状態にリセットされる二パターンがあったわね」

「へえ、よく調べてるなあ」

あれほど異世界転生モノに棘のある発言をするくせに、実際は案外好んでいるんじゃないのかな。

「まさか。作品を批評する人って実はかなり批評対象の作品を読んでいるものよ」

言えてる。

掲示板とかで、作家さんとか作家さんの書いたキャラとかにケチつける人がいるけど、内容がかなりの確なんだよな。

それゆえに批判がエグイと言わざるを得ないときがあったりするものだ。

「それでちよいちよい読んでいて気がつくことがあるものよ」

フウ、と鼻から息をはいて、腕組みをする真澄。

「それって？」

「どうも一人称の言い方がクドいって言うのかしら。敢えて言うのなら自己ツツコミと言えば言いのかしらね」

「自己ツツコミ……何だそれ？」

思うに、自分で言ったことを自分でツツコムという意味合いなのだろうが、それが一人称とどう繋がっていくのか。

もしかして。

これこれはこうだ、いや、そんなわけないだろ。などというツツコミかもしれない。

だとすれば、文章的にあまり問題はない気がする。

「普通一人称って自己の感情を表すことが利点なのはもちろん知ってるわよね？」

無論だ。

小説の書き方には大雑把で分類すると一人称と三人称があつて、一人称はとある一人から見た状況を書き綴る文章表現、逆に三人称だと複数の視点から書き綴る文章表現だ。

主に、僕が触れていて最もオーソドックスなのは、一人称寄りの三人称である。

それは、主語が登場人物の名前ではあるが、終始とある一人から見た視点で書かれており、ライトノベルだとこの視点が一番使われていると僕は思っている。

僕の例で言えば、一人称寄りの三人称は（ほぼ三人称と思ってくれたらいい）

久山は感情を吐露した……ってなるし

一人称だと

僕は感情を吐き出した……ってなるのかな。

「その一人称の文章の喋り方が異世界にいるのに所々現代の若者っぽい場面があるのよ」

「いまいちよく分からないな」

「うーん、なんていえばいいのかしら。極論で言えば、異世界であるにも関わらず、『とりあえず楽勝じゃね？』みたいな文章かし

らね」

「ああ、なるほどね。確かに僕も異世界モノはいくつか読んだことあるけど、たまに見かけるね」

ああいったものは個人差によるが、僕の場合は目にするとちよつと顔をしかめてしまう。

なぜと言われたら

「異世界つてあくまで私達とは全然違う世界じゃない。だから、本来ならばこの口調はしてはいけないと思うの」

真澄の言う通りだ。

ローファンタジーならばいざしらず、ハイファンタジーにその手法を用いると、急に冷めたようになってしまふ節がある。

ちなみに、ローファンタジーは現代の世界観に魔法とかが登場する話、ハイファンタジーは元から異世界で起こるファンタジーのことだ。

「だけど、それが異世界転生モノだとすると筋は通るね。だって主人公がもっていた世界は僕達と同じ世界なんだから」

「あつ」

「だろう。だからもしかしたら投稿する作家さんはそれを狙っていることなんじゃないかな？」

現代から異世界に飛ばされたことを強調するために、わざとそのような口調で言っているのだとしたらやり手だろう。

そんなことを考えていると、真澄が突然顔をにやつかせていた。

「ありえないわ。そんなことありえない」

そして我侘な王女様よろしくばっさりの一蹴。
ダメだ。顔が引きつった笑みになっている。

「そんな言いかたしたらダメだって。間違いなく楽しく異世界転生モノを書いている作家さんに嫌われるよ」

「私はそんな非難恐れないわ」

「女の子だけである意味男らしいよ」

偉大なことを成し遂げる人はいつだって批判を潜り抜けてきたくらいだからなあ。もしかしたら真澄にはその兆しがあるのかも。

「ハイファンタジーはね。もってこう現代からかけ離れたような世界観を書いたほうがいいと思うの。この世界には剣と魔法があり、自動車、飛行機、電気がない。だけど代わりに騎士団、王都、荷馬車がある。そこに現代っぽさを入れていいのかって私は思うのよ。そりゃあ、異世界転生モノが好きな人が世の中にたくさんいるわ。だからなるうのランキングでトップを飾るんだから」

ふむふむと、僕は真澄の熱弁を熱心に聞き取っていく。

「だけど私と同じ意見の人はいると思うの。だからお願い、ここに来て」

「……来てくれた所で愚痴の言い合いになるだろ」

そして酒を飲みあい談笑する。僕達は未成年だから決して酔うこ

とはいんだけれど。

「そういえば、初めから異世界の人間が何かをするっていうジャンルはどちらかというウケにくいよね。同じ異世界なのに」

「そうよ。やっぱり読者は異世界転生モノが読みたいと思っているのね」

なろうでウケる、かつ書きたいと思った純粋な異世界モノ。

満を持して工夫を凝らした設定を作って、真剣に書いた文章であるにも関わらず、言い方が悪くなるがあまり凝っていない量産型の異世界転生モノに負けて挫折した人も少なくは無いはずだ。

「て、言つかさ」

熱い論を行った後の真澄のしおらしい声は、どこか弱弱しい。

若干目に涙を浮かべていたのは、きっと本気で心の内をはき捨てたのだらう。

「……………どうしてなろうで投稿する作家は異世界転生にこだわるのかしら」

さしてあまり進展しない異世界転生モノに関する考察。

どうやら、まだまだ議論は続けることになるようだ。

異世界転生モノ考察 その3

「こだわる理由か。さつきも言ったと思うけどやっぱり流行なんじゃないかな」

異世界転生にこだわっているのではなく、厳密に言えば異世界転生モノが面白かったからなのだと思う。

「それって、有名人がああのを持っているし、友達が持っているから私も買ってみたいなものかしら？」

「うん。だって僕らも小説を書き始めたきっかけになったのも、一冊の本だ。つまり、影響を受けた作品の作風やジャンルがある種の基準になっているんだと僕は推測するね」

ファンタジー小説を読んで、どっぷりとはまる。それから自分も書きたいとなると、やはり書きたくなるのはファンタジーだ。

「つまり、異世界転生モノを読んで自分も書きたくなる。そして書いた異世界転生モノを読んでまた他の誰かが書きたくなる」

右手を顔の前へと持っていていき、真澄は計算するように白い指を一つずつ折っていく。

そうして目を半分だけ開けて気だるそうに呟く。

「それって、増え続ける一方じゃない」

「おつ、流石は真澄。そういうことになるね。だから異世界転生モノは読む人がいる限り書き手が増えて、どんどん両者が増えていく。そうだね、無限ループだ」

アハハとおどけて笑って見せたが、そんな僕の顔を上書きするほど怖い形相で睨んできた真澄に、夏前だというのに背筋がゾクリとした。

「それじゃあ、このまま異世界転生モノに喰われ続けろっていうの」

「だってさ。僕らがどやかく言ったところで所詮は二人。ユーザー登録数を見てみるよ。194,224人だぜ。中には読む専門がいてこのジャンルを好む作者が半数いたとする。ほら、それだけで約10万人だ。おおよそ0.002%が、もがいても仕方が無い」

真澄には悪いが、これは本当に仕方がないことだと思う。

世の流行に逆らったところで、それはただの自分が選んだ品にすぎないし何の意味も無いただの強がりとして捉えられるだけだ。もちろん小説も同じことだ。

「どうしてライトノベルの文庫にはジャンルの偏りがある？ それは読者が読みたいと思うジャンルがあるからだ。例えば、男がたくさんの女の子相手にキャッキヤするハーレムモノを好むジャンルがあればあの文庫だ、みたいだね。中にはまんべんなくばらけている出版社もあるけどね」

なにもネット小説と商業作品の傾向を混ぜなくてもいいと思うが、実際に小説家になろうではそのような現象が起きている。

つまり、小説家になろうというレーベルは、異世界転生モノだと思ってくれたらいい。

「むむむ」

うー、と唸って机へと突っ伏す真澄。見ているとナマケモノのようならんとしていて苦笑してしまう。

「ナマケモノみたいだ」

「うるさい！」

面白かったので、ついつい口に出していたら真澄の足が僕のつま先へと食い込んできた。幸いハイヒールではないためダメージは小だ。

「でも流行に逆らえないのは事実ね。だったらいつそのこと異世界転生モノのジャンルだけ別項目にしたらどうかしら」

「なるほど。そうすればあまり見てくれない現代モノや恋愛モノに目がいくね」

「でしょう。それに、だいたいあのサイトのレイアウトが小さすぎるのよ。更新された連載中小説の欄が小さすぎて、五分くらい経ったらすぐに流れるの。だから目に留まらないわ」

「まあ、そこはネット小説だからね。僕も同意見だけど」

しかし、あのレイアウトはなんとかならないのか。もう少し縦に伸ばしてくれたら見てくれる人も増えるっていうのに。それが、ボタンを押せば縦にびよんと伸びる形式にしたら少ない枠で多くの人が見てもらえるかもしれない。

「もしくは、更新された連載中小説を別ページに持っていけば、たくさん載せれると思うな」

「ナイスアイデアよ高明君。よし、さっそく運営にメールを送り

ましよう……高明君のユーザーネームで」

「やめろ。送るなら自分のやつで送って！」

勝手に人のアドレスで送らないでほしい。

「とまあこんな話は置いて、それよりも、この書きたくなり
ましたの人よ」

「ん？」

話が少し方向転換して変わったらしい。真澄の言いたいことを理解しようと頭を巡らせていく。

「そもそもね。私は何も異世界転生モノが嫌いっていうわけじゃないわ。面白い作品はいくらだってあるし、ちゃんと作りこめば読み手にだって共感できるジャンルなのよ。ただどね。これだけは譲れないからのはっきりと言わせてもらう」

言葉を紡いでいくにつれて、凄みが増していくようだ。なんだか目の前にいる少女がとても大きく見える。

「影響を受けるのはいいけど、安易な設定で書くのは止めるべき
だと思うわ」

……なるほど。そういったところに首を突っ込んでいくのか。

「はつきりと言わせてもらうけど、異世界転生モノと銘打って異世界転生の設定がまったく効力を発していない作品が多いのよ。現代で死んで神様に異世界に連れて行ってもらうまでいいわ。問題はその後よ。私ならこう思うんだけど、現代から異世界にやってき

たんだからきつとこの異世界に送り込まれるほどの訳があるはずなのよ」

うんうんと、彼女の言葉に横槍を入れないよう相槌を打つ。

「それなのに理由ときたら、『あつ、ごめん。間違つて死なせてしまった』っていう神様の台詞よ。これって安易すぎないかしら？まあ、こういった作品に慣れてしまつと別に主人公の死因なんてどうでもよくなるからね。現にそのところを全部はしょっていきなり『俺は異世界転生してしまつたらしい』で済みますから。だいたいねムグウ」

「わーわーわーっ！」

なんてことだ。真澄がヒートアップして口早にしゃべっているじゃないか。しかもやけに饒舌だし。

うん、自分の意見を述べる時に限って饒舌になる時って結構あったりすることはよくわかる。

だけど、ちよつと熱くなつた顔を冷まそうかという上辺の理由を元に、真澄の口に手を当てて塞いだ。

「なにふぐのびよ」

「ええと、ちゃんと理由はあるよ」

そして手を離すと、苦しそうに真澄が何度かむせていた。

「もう、いきなり何するのよ」

「一応体裁つてのがあからね。これ以上大きな声出すと本当に周りにいる異世界転生モノ書いている作家さん達が武装して襲いかかってきそつだから」

「なりふりかまってるかー！」

「そこでおーと言えないからね、僕は」

僕だってそのジャンルが上位を占めることには良い印象を持っていない。だけど、ここは冷静になってものを考えないといけない。なにせ僕が行っているのは批判ではなく分析なのだから。

「要するに真澄が言いたいことは、異世界転生モノと名乗るのはいいけど、安易に主人公を現代から持ってくるなってこと、でいいかな？」

「そうよ。だったら初めから異世界にいるって設定にすればいいじゃない。主人公もいちいち転生なんかしなくても異世界の住人ってことにすれば。どうせ転生で生まれた状態にしてるんだから、異世界生まれにしなさい、ってことよ」

異世界転生モノとしての種類の一つ、転生して元の肉体は消滅し、異世界での肉体を新たに授かるというもの。

精神は死んだ状態で、肉体だけが生まれたての状態だ。

つまり、結果としては純粹な異世界モノと何ら変わらないことを真澄は怒っているのだろう。

ここで、現代の知識をうまく生かして異世界での立ち回りを書くことが出来れば、その作品はいいものになるが、生かしきれないために安易な設定だけを借りたようになってしまう。

「あのさあ高明君」

「どうしたの？」

頼杖について、どこか遠くを見るように僕を窺ってくる。

「心は高校生なのに体だけが子供ってさあ、体が元の年齢に成長する間ってものすごく暇だろうね」

「うわー、どうでもいいことを聞いてくるなあ」

「だってさ、生まれてすぐの状態を描写しているのがあったの。それでさ、母親らしき人のおっぱいを吸うんだけど、啜えにくいとか言う文章がどこかにあったの。これかなりエロいんだと思うんだよね私は」

「はしたないなあ。女の子がそんなこと言ったらダメだって。だけど、僕が言ったら間違いなく変態のレッテルを張られて捕まってたな」

「なのにR指定が入っていないの」

「もうそのことはいいから！」

聞いているこっちまで恥ずかしくなってしまう話だ。

「そんなこと考えていたらキリがないって。それこそ有名な探偵漫画だってそうじゃないか」

「あれは楽しそうに事件を解決しているからわかるわ。それに比べて異世界転生モノは生まれたてよ。いちいち生まれたての子供を毎日演じるってきつと重労働だと私は思う」

はあ。異世界転生の話からだんだんと逸れている気がするなあ。だけど、この分は読者の想像で補えばいい、が僕の意見だ。

「その話は作者のみぞ知るってことで。……それじゃあ、真澄が言いたいことをまとめるよ。異世界転生モノを名乗るのはいいが、ちゃんと転生したきっかけを作ること。安易に神様頼みにするならいつそ最初から異世界ファンタジーにしろってことだね。それから、異世界ファンタジーとして浸りたいから現代風な口調をあまり使わない、でもこれは仕方がないと思う節が僕にはある、と。最後は……」

「小説家になろうトップページで更新された連載中小説の枠をもっと広げてほしい。異世界転生モノ枠を作ってはけてほしい」

「真澄、それは意見かもしれないけど、要望になってるよ」

そういったことは運営に頼んでください。

「安易な設定に関しては、ネット小説の範囲だからまあ仕方ないんじゃないかな。僕はプロとして書店に出したい意欲があるけど、ネットに投稿している人すべてがそうじゃないからね」

「かもしれないわね。あと、なろうの作家同士の連携が強いから異世界転生モノがさらに強くなるのかも」

「え？」

「日刊ランキング上位の人のお気に入り小説を見てみたら、皆同じ異世界転生モノを登録していたのよ。たまたま見つけたのだけだ」

「作者同士の連携か。でもこれは無意識だろうね」

好きなジャンルを書いているのだから、必然と同じジャンルへと目を向けるのは当然だ。

「さてと」

僕はひとまず真澄の言いたいことが一段落したと思って、パソコンをいったん閉じた。

だが、異世界転生モノなんてまだまだまだ序の口にすぎなかった。

「あ、そういえば」

どうしてだかわからないが、ビクリと僕は体をこわばらせてしまった。

それはきつと、まだ何か言いたいことがあるのだと直感で感じていたのだろう。

「神様によって異世界に運ばれる前に、いつも好きな能力を与えてやろうって描写があったような」

まさか、まさかのまさかなのか。

僕はげんなりした表情を真澄に見られないように作った。ぎりぎりの平常心を装った顔つきで真澄を何とか見る。

「どうして、なるうの作品にはああいった強すぎる能力ばかり与えるのかしら」

怒りはまた、怒りを呼ぶ。

どうやらお次は、チート能力。通称、俺TUEEEEと呼ばれるらしいジャンルについて物申すらしい。

異世界転生モノ考察 その3（後書き）

本当に異世界転生モノを楽しく書いている人には申し訳なく思っております。あくまで一個人（真澄ちゃん）の意見ですので、どうか寛大な心で読んでいってくれるとありがたいです。

さて、次回はチート能力に関する意見です。

異世界転生モノに併用して使われるこの設定。さて、真澄ちゃんはズバズバといってくれるのだろうか。

というわけで、こんなおかしな短編小説ですが、どうかよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9634z/>

なろうの異世界転生モノとかについて話し合う物語

2011年12月31日17時46分発行